

宮城 社会

## 連載「わが子はここにいる」

### ◎被災校舎の行方（1）大川小・保存

東日本大震災で被災した石巻市大川小、門脇小の両校舎を残すのかどうか、遺族や市民の意見が割れている。保存を求める声、解体を望む人、または、そのはざまで揺れる思い。亀山紘市長は今月中に保存の可否を判断する。震災遺構について考える。（石巻総局・水野良将、高橋公彦）＝9回続き

＜記憶をたどる場＞

鈴木典行さん（51）が大川小6年だった次女真衣さん＝当時（12）＝を失い、5年がたつた。

津波の脅威を今も生々しく伝える校舎の2階に足を運ぶ。教室のロッカーと廊下の上着掛けを必ず見る。真衣さんなら児童一人一人の名前のシールが残る。

「真衣に会える気がする。思いは変わらない。遺族に節目はないんです」

平穏な朝だった。2011年3月11日。鈴木さんはいつも通りハイタッチをして学校へ送り出した。「行ってきます」

真衣さんの「ただいま」の声は永遠に聞くことができない。「なぜ、亡くなったわが子を抱きしめなければいけないのか」。現実を受け入れられなかつた。

校舎と体育館を結ぶ渡り廊下が津波で横倒しになっている。体育館は原形をとどめていない。

真衣さんは4年からミニバスケットボールのチームに所属。体育館で練習に励み、「中学でもバスケをやりたい」と胸を躍らせていた。鈴木さんは指導者としてチームに関わった。

大川小は真衣さんの存在を確かめる場でもある。子どもたちとの記憶をたどるよすがとなる校舎、体育館を残してほしい。学校の近くに仮設事務所を構え、管理人として常駐したい。現地を訪れた人に津波の痕跡を見てもらい、ここで起きた出来事、教訓を語り伝えたい。鈴木さんの思いだ。

＜「時が止まった」＞

中村次男さん（41）と妻まゆみさん（42）は3年だった一人娘の香奈さん＝当時（9）＝を亡くした。

仕事中は悲しみや喪失感を頭の隅に置くよう努める。家に帰ると気持ちが底まで沈む。その繰り返し。

香奈さんの分もお菓子やデザートを買う。中村さんは「生活は香奈を中心に回っていた。震災から時が止まったままだ」と言う。

香奈さんは帰宅すると、学校での出来事を生き生きと話してくれた。「下の学年の子と遊んで疲れた」「友達と一緒に車に乗った。転んだけど楽しかったよ」

中村さん夫妻は校舎の全部保存を望む。せめて全校集会があったホールなどは残してほしい、と願う。「現物があれば、今後の子どもたちにも大川小であったことを伝えやすい」

住民団体「大川地区復興協議会」は校舎全体の保存などを市に求めている。浜畠幹夫事務局長（57）は石巻市職員時代に被災。遺族や地元住民、全国から来た人たちの意見を聞いた。

「校舎を見るのがつらい。壊してほしい」という声は理解できる。ただ、「未来の命を守るために校舎を残してほしい」との声により説得力を感じた。

13年10月に早期退職し、今は個人的にも保存を望む。「市には50年後、100年後を見据えた判断をしてほしい」と訴える。

【石巻市大川小、門脇小】大川小は校舎が1985年に完成。震災で児童108人のうち70人が死亡、4人が行方不明、教職員13人のうち10人が死亡した。現在は二俣小の校舎で授業をする。門脇小は1873年創立。震災で津波と火災の被害を受けた。既に下校していた児童7人が犠牲となつた。昨年4月、石巻小と統合した。



上着掛けと、鈴木真衣さんの名前が記されたシール（鈴木さん提供）

拡大写真



震災から5年となった今月11日、被災した大川小には遺族ら多くの人が慰霊に訪れ、法要も営まれた

拡大写真



拡大写真

宮城 社会 3.11大震災

## ＜被災校舎の行方＞表に出せぬ声 尊重を

◎石巻・震災遺構を考える（2）大川小・解体

### ＜心痛める遺族も＞

生きている人たちが心からの笑顔を取り戻す。それが、天国の子どもたちをも笑顔にする。宮城県石巻市大川小6年だった長女小晴さん＝当時（12）＝を亡くした平塚真一郎さん（49）はそう信じる。

東日本大震災の津波で変わり果てた校舎に毎日通い、手を合わせる。「みんな幸せになっていますように。まだ見つかっていない子を早く帰してあげて」

2011年8月。校舎から數キロ離れた海で遺体の一部が見つかった。DNA型鑑定の結果、小晴さんと確認された。幼い弟と妹をあやして笑わせる面倒見のいい姉だった。「本当に帰ってきたね」。一緒に搜してくれた不明児童の親らと涙を流して喜び合った。

大川小では今も児童4人の行方が分からぬ。校舎を壊して隅々まで捜したい。わが子の手掛かりを一つでも見つけたい。そう願う家族がいる。校舎を背景に写真を撮る来訪者の姿に、胸が締め付けられる遺族もいる。

「校舎を見て心を痛めている人たちに寄り添い、少しでも悲しみを取り除きたい」。校舎の遺構保存をめぐる2月の公聴会で、平塚さんは解体を強く訴えた。

保存を望む意見は、頭では理解できる。でも、心がついていかない。きれいに整備し、たくさんの花が咲き、集う人々の心が安らぐ場にしてほしい。全てを忘れないがためでは決してない。

市が昨年実施した校舎に関するアンケートで、地元住民の54.4%が「解体」と回答した。ただし、表面には現れにくい「解体」の声もあるという。

### ＜家族の間でも差＞

アンケートは世帯主宛てに送付。世帯主が世帯の意見を代表して答える仕組みだった。ある地元の遺族は家族で話し合った結果、「一部保存」との結論を出した。世帯主の男性は「いつまでも校舎を見ていたくない」と解体を望んだが、最後は家族の意向を尊重した。

世帯主の男性は、大川小で子どもを亡くした他の遺族の話にも耳を傾けた。「家族の間でも遺族の間でもそれぞれ考え方は違う。誰の考えも否定はできない」

校舎が立つ釜谷地区は津波で大きな被害を受け、住民の約4割に当たる193人が犠牲になった。釜谷地区で長く暮らした男性が振り返る。「あちこちに遺体があった。地獄だった」

震災前の釜谷地区の写真を、移転先の仮設住宅で大事に保管している。大川小のほか、民家やスーパー、郵便局、診療所、交番などが立ち並ぶ。

男性は暇さえあれば大川小の餅つきなどの行事を見学し、孫らの成長を見守ってきた。「大川小は地域のよりどころでもあった。くたびれた姿はもう見たたくない」と解体を求め、こう静かに続けた。

「解体の思いは一個人の感情と捉えられがち。声を上げにくい面があることを理解してほしい」



東日本大震災で被災した宮城県石巻市大川小、門脇小の両校舎を残すのかどうか、遺族や市民の意見が割れている。保存を求める声、解体を望む人、または、そのはざまで揺れる思い。亀山紘市長は今月中に保存の可否を判断する。震災遺構について考える。（石巻総局・水野良将、高橋公彦）



被災した大川小。校舎周辺は人が住まない災害危険区域になった=2月11日

[拡大写真](#)



石巻市長面地区で行方不明者の集中捜索をする宮城県警の警察官。長面地区では大川小の児童らが暮らしていた=11日午後2時10分ごろ

[拡大写真](#)

宮城 社会 3.11大震災

## <被災校舎の行方>全てなくして どう伝える

◎石巻・震災遺構を考える（3）門脇小・保存

### <店解体受け入れ>

もう二度と津波の犠牲者を出さない。その願いを被災した校舎に託す。

東日本大震災で壊滅的な被害を受けた宮城県石巻市門脇地区でラーメン店を営んでいた尾形勝寿さん（70）は、門脇小の保存を求める。

激しい揺れに見舞われた際、今も行方が分からぬ妻きみ子さん＝当時（59）＝と店にいた。津波に気付いて逃げようと玄関を出た瞬間、濁流にのまれた。勝寿さんは流れてきた屋根にしがみついて助かったが、きみ子さんの姿はなかった。

「なぜ2人で早く逃げなかつたのか」。後悔の日々が続いた。2012年7月、津波で鉄骨だけになった店舗兼自宅で本格的に仕事を再開。宮城県大郷町の借家から通い、キッチンカーでご当地グルメ「石巻焼きそば」を販売し、求められれば語り部も務めた。

震災から時間がたつにつれ、市内各地で被災した建物が解体されていった。隣接する南浜地区にあった市立病院も姿を消した。

「全部壊して何もなくなつたら、後世にどう伝えるのか」。危機感が募り、鉄骨の店を民間の震災遺構として残そうと奔走した。しかし、門脇では住宅地を整備する土地区画整理事業が本格化。「復興を遅らせられない」と、15年春に店の解体を受け入れた。

地区に残った被災建築物の門脇小には、国内外から震災学習のため人々が足を運ぶ。「妻は同じことを繰り返してはならないと叫んでいる。なんとか校舎を残してもらいたい」

### <見ると安心する>

門脇小卒業生のパート榎美紗子さん（27）は、校舎前の自宅で家族ともども津波にのまれ、母のひとみさん＝当時（51）＝と祖母の美代子さん＝同（79）＝が犠牲になり、父の健之（たけし）さん＝同（53）＝が行方不明になった。

自宅は跡形もないが、月に何度か立ち寄る。悲しみだけではなく、家族を思い出し、心を落ちさせられる場所だ。校舎も生活の一部。被災した姿だとしても、見ると安心する。

「震災後、敷地内のプールが壊されただけでも悲しかった。校舎がなくなると心に穴が空いてしまう気がする。これ以上、何も失いたくない」

自宅からは学校の校庭で子どもたちが鼓笛隊の練習をする様子や、幼稚園や町内会の運動会など住民の楽しそうな姿が見えた。津波で全てが失われたと思ったが、震災後に高校生が校庭で体育の授業をしているのを見て、思わず涙があふれた。かつての様子と重なった。

「校舎を見るのがつらい人には申し訳ないし、傷つけてしまったらどうしようかとも思う。それでも、校舎に愛着がある。解体されてみんなが門脇小を忘れ、なかつたことになるのは耐えられない」



東日本大震災で被災した宮城県石巻市大川小、門脇小の両校舎を残すのかどうか、遺族や市民の意見が割れている。保存を求める声、解体を望む人、または、そのはざまで揺れる思い。亀山紘市長は今月中に保存の可否を判断する。震災遺構について考える。（石巻総局・水野良将、高橋公彦）



門脇小の遺構保存を訴える尾形さん

拡大写真

2016年03月16日水曜日

宮城 社会

## ＜被災校舎の行方＞新居で惨状の姿見たくない

◎石巻・震災遺構を考える（4）門脇小・解体

### ＜廃校に思い複雑＞

大型重機が土を盛り上げ、一戸建て住宅用の宅地を整える。宮城県石巻市の日和山から眼下に広がる更地で、災害公営住宅の工事が進む。

東日本大震災で壊滅的な被害を受けた石巻市門脇地区は3年後、400戸1000人が住む街に生まれ変わる。

震災遺構の候補に挙がる門脇小はその中心部にある。津波と火災に遭い、色あせ、ほこりをかぶった校舎は、灰色の目隠しシートで覆われている。

地元の町内会でつくる住民組織「新門脇地区復興街づくり協議会」は「新しいまちにふさわしくない」と一貫して校舎の解体を求めてきた。

協議会の浅野清一会長（68）は約20年前に門脇に家を建て、門脇小に子どもを通わせた。「学校をはじめ、病院、スーパー、文化センターなど地域には何でもあった。年老いても便利だろうと居を構えた」と振り返る。

震災で全てがなくなった。自宅も流失した。惨状を目の当たりにし「門脇には二度と住めない」と思ったが、市は人が住める場所に指定した。宅地の造成が完了後、この地に息子と妻の3人で自宅を再建する。

門脇小は住民が集う地域の核だったが、児童数の減少で2015年3月、石巻小と統合した。

「震災前には300人の児童がいた。廃校になるとは思ってもいなかつた。学校がなくなれば若い人が住まなくなり、集落がなくなるのではないか」

宅地の本格供給はことし始まる。新しいまちづくりはどうするか。協議会は、地域コミュニティーの形成には子育ての場が必要として、市に保育所の整備を要望している。

「震災遺構は必要だと思うが、新しい住宅地には合わない。可住地にしたのは行政だ。なぜいまさら、住民の意向に反することをするのか」

浅野さんは夏に宅地が引き渡される。新居で年を越せるかもしれない。その時、被災した校舎の姿は見たくない。

### ＜教訓の伝承が先＞

門脇で生まれ育った阿部豊和さん（64）の自宅は日和山のふもとにあり、津波の被害を免れた。地域に残った住民と一緒に地域再生に取り組む。

門脇と隣接する南浜地区では、震災で539人が死亡・行方不明になった。市は住宅地のかさ上げのほか、南側に高さ3.5メートルを超える高盛り土道路を造るなど、津波防御を進める。

それでも住民の不安は消えない。阿部さんは「すぐ近くに山があるのに多くの犠牲者が出ていた。遺構を残す前に、その教訓を生かすべきだ」と言う。

日和山に逃げる道の多くは階段で、地域は高齢化が進む。「安全を考え、市有地である門脇小の敷地に車で日和山に逃げられる避難道をつくるべきだ」と阿部さんは提案する。



東日本大震災で被災した宮城県石巻市大川小、門脇小の両校舎を残すのかどうか、遺族や市民の意見が割れている。保存を求める声、解体を望む人、または、そのはざまで揺れる思い。亀山紘市長は今月中に保存の可否を判断する。震災遺構について考える。（石巻総局・水野良将、高橋公彦）



門脇小の周辺では、新たな住宅地の整備が進む。住民は複雑な思いで校舎の行く末を見守る

拡大写真

宮城 社会

## <被災校舎の行方> 議論尽くせる場必要

◎石巻・震災遺構を考える（5）揺れる思い

<意見示せず不安>

2月13日、石巻市飯野川中体育館。東日本大震災で被災した同市大川小の校舎の遺構保存をめぐる公聴会で、1人の女性が胸の内を明かした。

「保存が正しいのか、解体が正しいのか。実は分からないんです」

校舎周辺は津波で大きな被害を受け、災害危険区域となった。住みたくても住めない。多くの被災者がやむを得ず故郷を離れた。

女性もその一人。大川地区外の仮設住宅で暮らし、集団移転先が整備される日を待つ。

個人的には校舎を現状の姿で残してほしいと望む。震災から5年がたち、校舎でしか会えない人がいる。犠牲になった子どもたちを慰靈する時。吹きさらしで汚れた所を掃除する時。

女性が暮らす仮設住宅団地の入居者の半数近くは元大川地区住民だ。昨年秋、入居する元住民の多くに大川小の保存の是非などを問う市民アンケートは届かなかった。市は「大川地区に現在住所のある人らの回答で意向は十分反映される」などとして、元住民の枠を設けなかったからだ。

アンケート結果などを踏まえ、亀山紘市長は今月中に保存の可否を決める。

女性は「どんな結果となるのか不安だ」と言う。意思を示す貴重な機会がなかった元住民は市の対応に不信感を抱く。「住所を移さざるを得なかった事情をよく考えてほしい。大きな声では意見を言えない。アンケートに答えたかった」

<歳月を経て変化>

歳月の流れとともに、心境が変わりつつある大川小児童の遺族もいる。

ある遺族は震災当初、「解体してほしいとの気持ちが100パーセントだった」と明かす。校舎の近くに来ると、つらい記憶が脳裏に浮かぶ。静かに手を合わせたいと思うが、観光バスや大勢の来訪者を目にする素通りしてしまう。

あの日から前に進めない。それでも、いくらか落ち着きを取り戻し、校舎の行く末を考えられるようになった。保存を求める遺族らの話を耳にするうち「思いが分からぬではない」と心が揺らぐ。

震災で539人が死亡・行方不明となった石巻市門脇、南浜両地区。遺構候補に挙がる門脇小の校舎は、津波と火災の爪痕を残して住宅地に立つ。

石巻市の環境デザイナー阿部聰史さん（34）は「なぜ遺構が必要なのか。門脇地区の将来像をどう描くのか。住民や市民の理解が深まっていない。どんな結論でも問題になる」と話す。

南浜地区の復興祈念公園の計画策定に関わる。地域ではさまざまな思いが渦巻くのに配慮し、まちづくりや予算、整備の考え方などを専門家と市民が共有し丁寧な議論を心掛けた。

その経緯を踏まえ、阿部さんは訴える。「保存、解体の両者が話し合って結論を出すことが重要。議論を尽くし、住民や市民が納得する方向でなければ、校舎を残しても意味がないのではないか」



被災した大川小校舎の遺構保存に関する公聴会。複雑な感情が入り交じった

拡大写真

2016年03月18日金曜日